

2006 年度全体会議要旨：屋久島における森林利用の変遷 「価値づけから見た屋久島の人間—森林関係の歴史」

平野悠一郎¹

筆者は、主として明治期以降から現在までの屋久島における森林利用の変遷を、自然に対する人間の「認識」レベルにまで踏み込んで描き出すことを目的としている。

ある地域において、人間は、自己の生存において何らかの「便益」をもたらす自然の諸「機能」に対して「価値」づけを行っている。経済学的な意味での使用価値を含む功利的な価値づけはその代表的なものであるが、人間はその他にも、精神的な充足や科学的思考の発達など、多くの価値・便益を自然の中に見出してきた²。環境・開発などの自然資源利用をめぐる諸問題は、本質的に、これら多様な価値・便益を持つ個人・集団（＝アクター）同士の対立の表現であると考えられる。

この観点からすると、屋久島の森林とは、歴史的に異なる価値・便益の構図を持つ数多くのアクターによって、極めて複雑な利用・協力・対立の図式が描かれてきた対象である。

森林に対する人々の価値・便益の構図は、具体的な利用・改変等の「行為」に伴って表面化する。まず、屋久島において注目しなければならないのは、①森林ゾーニング（面）、②個別の林内動植物への注目（点）という、2つの異なる性質の行為・価値づけが混在していることである。前者の例としては、明治～大正期の官民有区分・共用林設定など、政府から島民に至るまでの様々な価値の構図・対立を背景とした、森林の権利関係の確定が挙げられる。これに対して、島民や島外業者による屋久杉、屋久杉土埋木その他への、功利的・精神的な価値に基づく注目と主張などが、後者の代表例である。森林をめぐる歴史的な対立・利用は、この2つの行為・価値づけに沿って主に表面化しているが、双方が全く関係しない訳ではない。例えば、1960年代に、国有林地・共用林地において区画指定による広葉樹の一斉伐採が行われた際、区画内で幾つかの樹種（屋久杉・カヤなど）が選り分けられ、国有林・住民によって利用されていた事例などは、「面」と「点」における価値づけの構図が交わる事を示している。すなわち、この性質分類に則ると、屋久島の森林をめぐる人間同士の関係構造は、①面一面、②点一点、③面一点という形に区分される。森林生態系における生物多様性の維持（面）という観点から、個別の森林資源の保護・利用（点）を図っていかうとする試みも、この面と点を繋ぐ価値の構図を持っていると考えられる。

これに加えて、同じ価値の構図を持つ多様なアクターも、様々な属性に区分できる（例：島内—島外、官—民、集団—個人など）。こうした行為の性質、アクターの属性を踏まえて、各時期の森林利用をめぐるマトリックスを描くのが、最終報告書に向けての目的である。

このアプローチの利点は、屋久島の森林をめぐる「誰が、どのような価値・便益に基づいて、どのように森林に働きかけてきたのか」という図式を、経験的に明らかにできる事である。一方で、「それらアクター別の価値・便益が、どのように満たされるべきか」という政策判断にまで及び得ないのが欠点である。このアプローチから望ましい政策判断への糸口を掴むためには、異なる地域を対象に比較研究を行い、価値・便益の構図と森林利用の変遷の相関関係に対する理解を積み重ねる必要がある。但し、「何らかの規準」（例えば、生物多様性の維持、貨幣価値に換算可能な便益のアクター間の平等など）に基づく政策判断を行う場合でも、「誰が、どのような価値・便益を持っているか」を把握することによって、より現実に即した政策実施を可能にするという、実質的な利点は有している。

¹ 東京大学総合文化研究科 国際社会科学専攻 国際関係論 博士課程 4 年
(hirano_yuichiro@yahoo.co.jp)

² 例えば、Kellert, S. R., *The Value of Life*, Island Press, 1996.